

(31)	(30)	(29)	(28)	(27)
淨全七卷	淨全一卷	淨全七卷	淨全七卷	淨全三卷
二三頁	六頁	二三頁	二三頁	一〇頁

多者上尺一形也少者下至二十声一声等也。也。積云。下至。下者。下者。对上之言也。下者。下至。十声。一声等也。上者。上尺一形也。上下相对之文。其例。惟多宿命通願云。設我得。仏国中人。天不識。宿命。下至。不。知。三百億那由他諸劫。事者。不。取。正覺。如。是。五神通。及以。光明。壽命等願。中。一。置。下至之言。是則。從。多至。少。以下。对上之義。他例。上八種之願。今此願。乃至。者。即是。下至。也是。故。今。善導所。引。積。下至之言。其意。不。相違。

とある。即ち、『無量寿経』(上)の宿命通の願を始め、五神通の願、光明無量、寿命無量等の願の中に「下至」という語があり、一生涯の上という語に対して上下相對の意味としてこれらの願文の「下至」の文の例に依って、この第十八願文の「乃至」を「下至」にしたのである。そして法然もこの釈に同意している。続いて「十念往生」について説いている。即ち、

但善導与諸師其意不同。諸師之釈別云。十念往生願。善導独総云。念仏往生願。諸師別云。十念往生願者。其意即不周也。所引然。二者上捨。一形下捨。一念之故也。善導総言。念仏往生願者。其意即周也。所引然。二者上取。一形下取。一念之故也。

とあり、これは願意を正し「十念」という数の問題を正す為の文であり、これによれば、上み一生涯から下も臨終の一声一念に至るまで、総てが念仏往生願として本願となることを説いて、その意を明示したものである。

註

- (1) 浄全一卷 七頁
- (2) 浄全四卷 二三三頁
- (3) 浄全四卷 三七六頁
- (4) 浄全四卷 三七六頁
- (5) 浄全一卷 五〇頁
- (6) 浄全一卷 六九三頁
- (7) 浄全一卷 二三六頁
- (8) 浄全一卷 二三八頁
- (9) 浄全一卷 六七二頁
- (10) 浄全一卷 六九三頁
- (11) 浄全一卷 七〇四頁
- (12) 浄全四卷 三五六頁
- (13) 浄全七卷 二二頁
- (14) 浄全七卷 二二頁
- (15) 法然上人全集 四九二頁
- (16) 浄全九卷 五七六頁
- (17) 法然上人全集 五九五頁
- (18) 法然上人全集 五五九頁
- (19) 蓮華谷とは明遍のことである。
- (20) 浄全二卷 四二二頁
- (21) 勝願院とは良遍のことである。
- (22) 浄全二卷 四二三頁
- (23) 『觀經』の十念を以って方便とする。
- (24) 浄全一卷 六八五頁
- (25) 浄全一卷 六八五頁
- (26) 浄全二卷 九頁

謂心忘^レ仏時口稱^レ仏名^ニ其声入^ニ我耳^ニ起我心念^ニ心念若起^レ此念亦勸^レ声令^レ唱^ニ仏名^ニ是故念勸^レ声声起^レ念常不^レ忘^レ仏。

②③ といつて「念」と「声」との関係を明かしている。更に又称名による往生について、道綽の頃から始つた撰論家の浄土教にたいする反駁、即ち別時意説の誤謬を正す必要があつた。善導も又、これに對し願行具足の名号のいわれを明かすことにより、仏の願力によつて往生する「十念往生」が真の教えであるとした。即ち、道綽は『安樂集』第二大門において

撰^テ撰論^ト与^ニ此經^ニ相違^ト上^ニ料^ト簡^ト別時意語^ニ者^今觀經中^ニ仏說^ト下品生人現造^ニ重罪^ニ臨^ニ命終^ニ時遇^ニ善知識^ニ十念成就^ト即得^ニ往生^ト依^ニ撰論云^ニ眞^ニ別時意語^ト又古來通論之家多判^ニ此文^ニ云^ニ臨終^ニ十念^ニ但得^レ作^ニ往生^ト因^ニ未^ニ即得^レ生^ト。

④⑤ と撰論を奉ずる人々の説を示し、又その後の文に道綽自身の別時意の解釈を示している。即ち、

今解^セ別時意語^ニ者謂^ニ仏常途^ニ說法^ニ皆明^ニ先因後果^ニ理數炳然^ト今此經中^ニ但說^ニ一生造罪^ニ臨^ニ命終^ニ時^ニ十念成就^ト即得^ニ往生^ト上^ニ論^ニ過去有因無因^ニ者直^ニ是世尊^ニ引^ニ接^ニ當來造惡^ニ之徒^ニ令^ニ其臨終^ニ捨^レ惡^ト歸^レ善乘^レ念^ニ往生^ト是以隱^ニ其宿因^ニ此是世尊^ニ隱^レ始^レ顯^レ終^レ沒^レ因談^ニ果名^ト作^ニ別時意語^ト。

⑥⑦ である。善導も『觀經玄義分』の文において來通論家の説を

久來通論之家不^レ會^ニ論意^ニ錯引^ニ下品^ニ下生^ニ十声称^ニ仏^ト此相似^ト未^ニ即得^レ生^ト如^ニ一金錢^ニ得^レ成^レ千者^ニ多日^ニ乃得^レ非^ニ一日^ニ即得^レ成^レ千十声称^ニ仏^ト亦復^レ如^レ是^ト但^ニ与^ニ遠生^ニ作^レ因^ト是故未^ニ即得^レ生^ト 善^ニ直

為^ニ當來^ニ凡夫^ニ欲^レ令^ニ捨^レ惡^ト稱^レ仏^ト誑^ニ言^ニ善^ト生^ト実^ニ未^レ得^レ生^ト名^ニ作^ニ別時意^ト。

⑧⑨ と明らかにし、この「十声称仏」とはいかなるものかについて次に述べている。即ち、

今此觀經^ニ十声称^ニ仏^ト即有^ニ十願^ニ十行^ニ具足^ト云^ニ何^ニ具足^ト言^ニ南無^ト者即是^レ歸命^ト亦是^レ發願^ト廻向^ト之義^ト言^ニ阿彌陀^ト者即是^レ其行^ト以^ニ斯義^ト故必得^ニ往生^ト又來論中^ニ稱^ニ多寶^ト爲^レ求^ニ仏果^ト即是^レ正報^ト下唯發願求^レ生^ト淨土^ト即是^レ依報^ト一正^ニ一依^ニ豈得^ニ相似^ト然^ニ正報^ニ難^レ期^ト一行雖精^ト未^レ剋^レ依報^ト求^レ所^ニ以^ニ一願^ニ之心^ト未^レ入^レ雖^レ然^ト譬如^ニ一辺^ニ方^ニ投^レ化^ト即易^ト爲^レ主^ト即難^ト今時願^ニ往生^ト者^竝是^レ一切^ニ投化^ト衆生^ト豈非^レ易也^ト但能^レ上^レ尽^ニ一形^ト下^ニ至^ニ三十^ニ念^ト以^ニ仏願^ニ力^ト莫^レ不^ニ皆往^ト故^ニ名^ト易也斯乃^レ不可^レ以^ニ言^ニ定^ニ義^ト取^レ信^ニ之^ニ者^ト懷^レ疑^ト要^ニ引^ニ聖教^ト來^ニ明^ニ欲^レ使^レ聞^レ之^ニ者^ト方能^レ遣^レ惑^ト。

⑩⑪ とある。そしてこの中の「十声称仏即有十願十行具足」とは、『無量壽經』（第十八願文）の十念を『觀經』の「具足十念称南無阿彌陀仏」と解釈した為である。この願行具足の説は、法然によつて『選択集』第二章における五番相對の第四にとりあげられ、不廻向義の証拠文とされている。

次に法然は『選択集』第三章私釈段において「乃至」と「下至」についても説かれている。即ち、

問曰^ニ經云^ニ乃至^ニ積云^ニ下至^ニ其意如何^トと問かれ、それに答えて、
答曰^ニ乃至^ニ下至^ニ其意^ニ一^ニ經云^ニ乃至^ニ二者^ニ從^レ多^ニ向^レ少^ト之^ニ言^ト也

答曰念声は一何以得^レ知^ル 觀經下品下生云令^ニ声^ヲ 不^レ絶具^ニ足^シ 十念^ニ稱^ニ南無阿彌陀仏^ト 稱^ニ仏名^ヲ 故於^ニ念念中^ニ 除^ニ八十億劫^ヲ 生死之罪^ヲ 今依^ニ此文^ニ 声是念^{ナリ} 念即是声^{ナルコト} 其意明^{ラケシ} 矣。⁽¹⁴⁾

ここで明らかにしているのは、『觀經』の下々品の文に依って「念声は一」の義をたて、「声是念、念即是声」であるとしていることである。この「声是念」と「念即是声」とはどのような関係であるかを探る事が、法然における「念」と「声」との関係をはっきりさせるものと思う。法然は『つねに仰られける御詞』の中で

南無阿彌陀仏といふは、別したる事には思べからず。阿彌陀ほとけ我をたすけ給へといふことばと、心えて、心にはあみだほとけ、たすけ給へとおもひて、口には南無阿彌陀仏と唱る⁽¹⁵⁾と述べている。この「たすけ給え」という凡夫の願いが、その心のかたむきが「念」であり、それが自然に「声」になって口から外にその思いを表わし出すのであり、これが「念即是声」を指しているのである。即ち、心の内から口を通して外へ表現する事であると言える。ではその様な帰命の心が無い凡夫は往生することができないのかと言えは、そうでは無く、外に南無阿彌陀仏と声に出したその事がやがて自らの内に薰習されて、内なる心を「たすけ給え」と思う心にしてゆくのである。それが「声是念」を指しているのである。次に法然は「声是念」を「念即是声」より先に指摘したのかについて注目したい。先述した様に「声是念」とは外から内への方向を示し、「念即是声」とは内から外への方向を示したものである。即ち、法然が内に「たすけ給え」という心を持たない凡夫にその様

な心を持つてほしいという願いから出てきたものであると言える。この点については『十二問答』の中で次の様に述べている。

口にてとなふるも名号。心にて念するも名号なれば。いづれも往生の業とはなるへし。たゞし。仏の本願は。称名の願なるがゆへに。声をたててとなふへき也。⁽¹⁶⁾

又『浄土宗畧抄』では、

たゞ口に南無阿彌陀仏と申せば、仏のちかひによりて、かならず往生するそと決定の心をおこすへき也。その決定の心によりて、往生の業はさたまる也。

と記し、又『往生浄土用心』では、

仏の本願の称名なるかゆへに、声を本体とはおほしめすへきに候。さてわかみにきこゆる程申し候は高声の念仏のうちにて候なり。⁽¹⁷⁾

と記されている。即ち、阿彌陀仏の本願に従って法然がその様な願いに及んだと言え。又、この「念」と「声」との関係について示された事から考えると『選択集』の題目の次の行に「南無阿彌陀仏往生之業、念仏為^レ先」と記し、念仏を総ての事柄の最先に持つていった事がより一層はつきりするのである。又、良忠は『觀經散善義伝通記』巻三において、

蓮華谷云念在^レ内言彰^レ外行者信^レ仏欣心深故出^レ声而唱^ニ仏救^ニ我^ヲ也。⁽¹⁸⁾

といひ同じくその後、

勝願院云(中略)唯称名行常不^レ忘^レ仏不^レ忘^レ仏故成^ニ決定業^ニ

設我得仏十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不取正覺
唯除五逆誹謗正法

(1) この願文においては、「乃至十念」と表わしている。がその後
善導の『観念法門』、『往生礼讚』において、「念」が「聲」と改め
ている。即ち、『観念法門』においては、五種増上縁義の第四摂生
増上縁で

即如無量寿經四十八願中說、佛言若我成仏、十方衆生願往生
我國稱我名字、下至十声、乘我願力、若不取正覺、此
即是願往生行人命欲終時、願力攝得往生、故名摂生増上縁。
(2) とある。又『往生礼讚』後序においては、

如無量寿經云、若我成仏、十方衆生稱我名号、下至十声、若
不取正覺、彼仏今現在、世成仏、當知本誓重願不虛
衆生称念、必得往生。
(3)

さらに

汝等衆生皆信是、一切諸仏所護念、云何名護念、若有衆
生称念、阿彌陀仏、若七日及一日、下至十声、乃至一声、一念等、
必得往生。
(4)

とある。この「念」を「声」に改めるといふことはいかなる意味に
おいてなされているのであろうか。それは結論からいえば、『観無
量寿經』下々品の「令声不絶(5)具足十念称南無阿彌陀仏」の文によつ
て願文の「十念」を「十声」にしたのであり、それは又、第十八願
の「十方衆生」を一生造惡の機として受けとつてゐることを暗示し
たのである。即ち、道綽は『安樂集』第三大門において次の様に示

している。

大經云、若有衆生、縱令一生造惡、臨命終時、十念相續、稱我名
字、若不取正覺。
(6)

このように願文の「十方衆生」を「一生造惡」の下々品の機と受け
とり、その上で「念」を「声」に切り替へることを試みたのであ
る。即ち、『観經』の下々品の文に通じていて、この下々品の機に
注目したのは、曇鸞であり、『往生論註』上巻において

但言憶念、阿彌陀仏、若総相若別相隨、所觀縁、心無他、想十
念相續、名為十念、但称名号、亦復如是。
(7)

と示し、同じく下巻においては「称名憶念」とあり『略論安樂淨土
義』においては、称名の説明を具体的に「声声相次使成(9)十念」と
示している。即ち、五逆十惡を具する凡夫は行を起し道を修して
も往生行を得ることができないので、十念相續をもつて往生行を得
ることを述べているのである。この「十念相續」とは即ち「令声不
絶」に通じるのである。そして善導のいう「十声」もここから解釈
したと思われる。即ち、この『安樂集』において、第十八願文と
『観經』の下々品の經意を詮顯して「唯有淨土一門、可通入一路」と
し「上(10)上(11)形、下至十念、無不皆往」と解釈して善導が本願の
「十念」を解する時、前述のように「上(12)上(13)形、下至十声、一声」と
という文に通じるのである。そして法然はこのことに関して『選択
集』第三章私積段において、

問曰、經云、十念、積云、十声、念声之義如何。

という問に対して次のように答へている。

撰^{セリ}在^ニ阿^ニ弥^ニ陀^ニ仏^ノ名^ノ号^ノ中^ニ一。

と述べられている。では、阿弥陀仏はその第十八願において衆生と
いかにつながっているのが問題になってくる。仏は我が名号を称
するものを等しく浄土に迎えとろうとし、衆生はこの阿弥陀仏の本
願の聖意のままに称名を行すれば、唯その一行によって仏に対して
人格的に対応し、往生を得るのである。言い換えれば称名の一行に
おいて仏、凡のかかわりが成立するのであって、いかに本願に称名
を生因として示されてあっても、衆生によって称名が行われなけれ
ば、衆生とのかかわりを全うすることはできないと言える。この正
定業に対して助業は補助の為ではなく、助発の為であると言える。
即ち、助業を行ずるのか否かは、衆生の各各性によって異ってくる
のである。助業を行ずる者をして正定業に徹せしめるのが助業の役
割であるから、称名の一行に徹することのできる者にとっては、助
業は不要である。これら三選択によって法然は、唯仏の本願を信じ
その本願のままに念仏すれば、総ての衆生が必ずその本願によって
浄土に往生することができるという事を示していることがわかる。

註

- (1) 浄全七卷 八三頁
- (2) 浄全七卷 八四頁
- (3) 浄全二卷 五八頁
- (4) 浄全四卷 三五六頁
- (5) 浄全四卷 三五六頁
- (6) 浄全七卷 一八九頁

(7) 「因明直弁」については、『往生要集』巻下の第八念仏証掘門（浄全
十五卷一二九頁）で「問余行寧無勸信文耶答其行法因明彼法種種
功能^ニ其中自説^ニ往生之事^ニ不^レ如^ニ直弁^ニ往生之要^ニ多云^ニ念仏^ト何況^ニ自既
言^レ当^レ念^レ我乎亦不^レ云^ニ仏光明撰^ニ取^ニ余行人^ト」とあって、法然は「往生
要集釈」（法然上人全集二六頁）の中でこれを釈して「因明不因明。謂
諸行專為^ニ往生^ト不^レ説^レ之、念仏專為^ニ往生^ト撰説^レ之。」と示している。

- (8) 法然上人全集 七六二頁 其十七
- (9) 浄全七卷 一九頁
- (10) 浄全七卷 一八九頁
- (11) 浄全七卷 一八九頁
- (12) 浄全七卷 七〇頁
- (13) 法然上人全集 四五一頁
- (14) 法然上人全集 二六一頁
- (15) 浄全七卷 六頁
- (16) 『中論』卷第三觀法品第十八（大正藏^{30,24}）
- (17) 法然上人全集 四五七頁
- (18) 浄全二卷 五八頁
- (19) 浄全七卷 一三頁
- (20) 浄全七卷 一一頁
- (21) 浄全七卷 一〇頁
- (22) 法然上人全集 八一頁
- (23) 浄全七卷 一九頁

(二)

次に念仏往生について阿弥陀仏の四十八願文の第十八願文では次
の様に書かれている。

若行ニ後雜行一即心常間斷雖レ可ニ廻向得レ生衆名ニ疎雜之行ニ也。
に基づき法然は『選択集』第二章私積段に、

修ニ雜行ニ者必用ニ廻向ニ之時成ニ往生之因一若不レ用ニ廻向ニ之時不レ
成ニ得往生之因一。

と述べている。正行は阿弥陀仏に基づく行であると言ったが言い換
えれば、阿弥陀仏と人格的に親しい関係につながることで行
である。よって法を悟る成仏の行ではなく、行自体がそのまま仏に
救われるのである。この阿弥陀仏と親近な関係におかれているとい
うことは、正雜二行の得失の中の親疎対、近遠対に示されている。
即ち、『選択集』第二章私積段に、

親疎対者先親者修ニ正助二行一者於ニ阿弥陀仏ニ甚以爲ニ親昵ト故
疏上文云衆生起レ行口常稱レ仏即聞レ之身常礼ニ敬一仏即見レ
之心常念レ一仏即知レ之衆生憶ニ念一仏一者亦憶ニ念一衆生一彼
三業不ニ相捨離ニ故名ニ親縁ニ也次疎者雜行也衆生不レ稱レ仏即
不レ聞レ之身不レ礼レ仏即不レ見レ之心不レ念レ一仏即不レ知レ之衆
生不レ憶ニ念一仏一者不レ憶ニ念一衆生一彼此三業常捨離故名ニ疎行一
也第二近遠対者先近者修ニ正助二行一者於ニ阿弥陀仏ニ甚以爲ニ隣
近ニ故疏上文云衆生願レ見レ仏即應レ念現ニ在一目前ニ故名ニ近縁一
也次遠者雜行也衆生不レ願レ見レ仏即不レ應レ念不レ現ニ目前ニ故
名レ遠也。

とある。これらのことから分るのは、法然は仏教総ての行の中から
唯阿弥陀仏と人格的に直接つながれる行を正行として選び、他の総
ての行を雜行として捨てたのである。

次に正助二業における選択であるが、これは五種正行の中の第四
の称名正行を正定業として他の四正行を助業として、正定業を専ら
にして助業を傍とするのである。このことについて法然は『選択
集』第二章私積段と『無量寿経釈』で次のように説いている。『選
択集』においては、

問曰何故五種之中独以ニ称名念仏一為ニ正定業一乎答曰願ニ彼仏
願ニ故意云称名念仏是彼本願行也故修レ之者乘ニ彼願一必得ニ往
生一也。

とあり、『無量寿経釈』では、

問曰何故五種之中独以ニ称名念仏一為ニ正定業一乎。答曰。願ニ
彼仏願ニ故。意云。称名念仏是彼本願行也。故修レ之者、乘ニ彼仏
願ニ必得ニ往生一。由ニ願不レ虚故、以ニ念仏一為ニ正定之業ト。本願義至レ
下應レ弁。但正定者、法藏菩薩於ニ二百一十億諸仏誓願海中、選ニ
定念仏往生之願。故云レ定也。選択之義亦如レ前依ニ此等意故、以ニ
念仏一名為ニ正定之業一者也。誦誦等行即非ニ本願選擇之行一故、名
為レ助。念仏亦是正中之正、礼誦等是正中之助。正助雖レ異、同在ニ
弥陀一故雖レ為レ正、然非レ無ニ勝劣之義一。

とある。即ち、称名正行が仏の本願（第十八願）に言われる生因の
行であるからであり、このことから考えれば、先に述べた仏との人
格的なつながりが称名念仏によって究極的に見い出されるのであ
る。このことについて『選択集』第三章私積段において、

名号是万徳之所レ歸也然則弥陀一仏所有四智・三身・十力・
四無畏等一切内証功德相好・光明説法・利生等一切外用功德皆悉

とを指摘している。この三つの選択を三重の選択という。これらを言い換えれば、阿弥陀仏の本願の行である称名念仏を専修することに帰することである。これら三つの選択は、どのような内容であるのかについては、まず聖道門と浄土門との選択においては、法然は醍醐本『法然上人伝記』の「三心料簡および御法語」に、

凡聖道門極智恵離生死、浄土門還愚癡一生極樂、所以趣聖道門之時、瑩智恵守禁戒、淨心性以為宗。然入浄土門之曰、不憑智恵、不護戒行、不調心器、只々無甲斐成無智者、憑本願願往生也云。

とある。即ち、聖道門は自らの智恵による成仏の教であるのに対し、浄土門は仏の慈悲による往生の教であり、三学を修めないで愚癡のままであっても専ら阿弥陀仏の名号を称え、仏の本願によって往生することができると考えた。言い換えれば、浄土門は法然の三学非器の自覚のうえで展開し、その自覚を基いて一代仏教を見直したのが聖浄二門判である。又、『逆修説法』のなかの第四七日によれば、

浄土宗中、大小乗諸経、皆悉可在也。

とある。結局浄土門が大小乗を含めたすべての仏教であるとした。そして聖道門を捨て浄土門に帰すべき理由として『選択集』第一章私積段に、

凡此集中立聖道浄土二門意者為令捨聖道入浄土門也。就此有二由一由去大聖遙遠二由理深解微

と示され二つあげられている。即ち、第一の理由として、釈尊の入

滅から遙遠な歳月が経過しているので能救済者としての釈尊の直接的指導が得られないこと、さらにはその人格的な影響力が薄くなり、仏、凡の人格的な関係が断たれていること、第二に分別を事とする凡夫にとって「心行言語断」という領域の法を解行することが困難であるとし、これら二つのことによっては生死を離れることが出来ないというのである。しかるに「一切衆生平等往生」を自らの本願とする阿弥陀仏の聖意にすぎり、その仏願力を増上縁とすることによって浄土に往生すべきであるとしている。又、さらにこのことは、浄土門に帰することにより、法による解脱の成就し難い者でも仏願力によって総て往生を成就することができるを意味し、これら二種の理由のなか、前者は仏・凡の人格的対応を示すものであり、後者は、出離生死道としての解行から往生浄土への転換を意味するのである。

次に正雑二行における選択であるが、この選択においては雑行を捨て、仏との人格的なつながりをもつ正行に帰することを明らかにしている。正行雑行の区別は、阿弥陀仏にかかわる問題であるといえる。正行は、阿弥陀仏に基づく行であり、雑行は、阿弥陀仏に親しくなく、疎かにし、疎んじ、遠ざけるところの行である。即ち、法然は『三心義』の中で「正行といふは阿弥陀仏におきてしたしき行なり、雑行といふは阿弥陀仏におきてうとき行なり。」と指摘しているのがそれである。よって雑行の者は、常に阿弥陀仏との人格的対応に間断が持たれるから、往生を得るのに必ず廻向を必要とするのである。このことは、善導の『観經散善義』の中の

る旨を説いたもので、口称念仏が選択本願の行であることがわかる。

次に良忠の『選択伝弘決疑鈔』(一)によると良忠は、弁長の説をふまえながら次の事を指摘している。

一者念仏。二者本願念仏。三者選択本願念仏也。初言念仏者万行随一念仏也。是当諸師所立念仏之義。未分一別正雜助正。故。次言本願念仏者於万行中二分一別正雜。於正行中一細一判。助正。其正業者称名念仏。順。弥陀本願。故。故止雜行一専行念仏。是当今家所立念仏之義。後言選擇本願念仏者於本願義之上。更加一選擇一義。

即ち、第一の念仏をもって正雜、助正未分の万行随一の念仏であり、本願、非本願の別を分判しない念仏であるとし、第二の本願念仏をもって、万行について正雜、助正を分判した弥陀の本願に随順する正定業としての称名であることを指摘し、第三の選択本願念仏をもって、先の本願義の上にさらに法然が選択の一義を加えたものであるとしている。さらに、法然が選択の一義を加えたことについては、良忠所伝の『浄土宗要集聴書』にある。

先師云、故上人云、諸師作文必本意有一。慧心立因明直弁之義、善導釈本願念仏一義。予立選擇一義。造選擇集也。云云⁽⁸⁾

で明らかである。又『選擇集』第三章私釈段においても、
即今選擇前布施持戒乃至孝養父母等諸行。選取専称念仏号。故云選擇也。

とある。又、良忠が弁長と相対的なのは、同じく『決疑鈔』(一)にお

いて

今此集中非三備存ニ 三義ニ三義相一成唯為ニ一義。

ということを強調している。即ち、

念仏非直念仏。則是本願念仏也。本願念仏亦非直本願念仏。則是選擇本願念仏也。

といっている。これらの事から分るのは、弁長の説が横の積み重さねであるのに対して、良忠の説は縦の積み重さねである。唯、同一の趣旨である事は『選擇集』の一部の説くところ総て悉く称名念仏に外ならないという事を指摘していることである。この様に選擇本願念仏とは、阿弥陀仏がその本願に衆生往生の行として諸善万行の中から称名念仏の一行を選択され念仏であることを指し、法然は、この本願の聖意に基づいて称名念仏の一行に徹すると共に三重選擇義を、『選擇集』第十六章私釈段において開陳することによって阿弥陀仏の本願の聖意の開頭につとめている。即ち、

速欲離生死二種勝法中 且闍聖道門ニ選入ニ浄土門ニ欲入ニ
浄土門ニ正雜二行中 且抛諸雜行ニ選應レ帰ニ正行ニ欲修ニ於正行ニ
正助二業中 猶傍ニ於助業ニ選應レ専ニ正定ニ正定之業 者即是称ニ仏
名ニ称ニ名必得レ生 依ニ仏本願ニ故

とあるように、釈尊一代の所説を浄土宗の立場から聖道門と浄土門に分け、聖道門を且らく闍いて浄土門に入るべきことを指示し、さらに浄土門における往生浄土の行について正雜二行に分け、雜行を且らく抛って正行に帰すべきことを指摘し、さらにその正行を正助二業に分け、非本願行である助業を傍にし専ら正定業に徹すべきこ

『選択本願念仏集』の念仏

秦 智 宏

(一)

『選択本願念仏集』の題目である「選択本願念仏」について弁長と良忠は、それぞれ三重の念仏を分けている。即ち、弁長は『徹選本願念仏集』(上)において、

南無阿弥陀仏往生之業 積シテ 曰ク 先就ニ 本選択集之題ニ 此有ニ 三義ニ 所謂ル 第一本選択集之題中。言ハ 念仏ト 者是レ 諸師所立之口称念仏也。故題次行言ニ 南無阿弥陀仏ト 也。第二本選択集之題中。言ハ 本願ト 者是レ 善導所立之本願念仏也。故題次行言ニ 南無阿弥陀仏ト 也。第三本選択集之題中。言ハ 選択ト 者是レ 然師所立之選択念仏也。故題次行言ニ 南無阿弥陀仏ト 也。是故本選択集之題中雖有ニ 三重念仏之義ニ 俱非ニ 観念之念仏ニ 但是口称念仏也。⁽¹⁾
と云うように三重念仏義を創説している。それは、第一に諸師所立の口称の念仏、第二に善導所立の本願の口称念仏、第三に法然師所

立の選択本願の口称念仏の三義である。又、弁長は同じく『徹選本願念仏集』(上)において、

又第一念仏義者是依ニ 和漢両朝往生伝ニ 記レ 之ヲ。第二念仏義者是依ニ 善導和尚観経疏ニ 記レ 之ヲ。第三念仏義者是依ニ 三部之阿弥陀経ニ 記レ 之ヲ。此三義亦是行者之口中所唱之称名念仏也。⁽²⁾
と云うて三重念仏義の基盤となるものを示している。即ち善導は、『観経散善義』に「若口称 即一心専称ニ 彼仏ト」⁽³⁾と説き、又、口

称念仏に関して『往生礼讃』に

若能如レ 上念念相続畢命ヲ 期者十即十生百即百生。

若欲捨レ 専修ニ 雜業ヲ 者百時希得ニ 一二千時希得ニ 五三ニ。

と説いている。この文は阿弥陀仏の本願の行である称名念仏を専修するのであるから

無ニ 外雜縁ヲ 得ニ 正念ニ 故与ニ 仏本願ヲ 得ニ 相応ニ 故不レ 違レ 教故随ニ 順ニ 仏語ニ 故。⁽⁵⁾

という理由によって専修の者は、十人は十人、百人は百人皆往生す